

創立二十周年に当って

元医学部長 樋口 謙太郎



現し、研究の内容もその実績が、あるときタクシーに乗るに当たって、患者は嘔吐するに至った。

現在問題になっている看護婦不足当初は苦しかったが、現在は順調に推移しつつあるように思われる。

私は昭和五十年までで管理職を辞した。そしてこれまでに医学部、病院発足に当たっての苦心談ばかりをあげてきたが中にはほほえましいエピソードも二、三思い出される。

福大病院は昭和四十八年八月に開設されたが、その時点で代用病院の香椎病院は閉鎖された。その際入院患者の警察の協力をえて救急車十数台を運んで香椎から七隈まで市の中央部をつつ走った。世紀の病院移動と新聞に掲載され、記録映画も作製された。

創設時代の苦心談はいろいろな機会に述べたので、ここではその詳細を省略する。いずれにしても、何かをはじめるには創業に際しての努力とそれを維持、拡充させる努力が期待される。

医学部新設に当り最初に私に課せられた使命は、スタッフを揃えること、医学部並に病院の設計設備、組織作り、完成までの代用病院の準備、カリキュラム作製などで、最も重要な資金計画については大学当局並びに理事会で考慮されることになった。

まず最初にとりかかったのはスタッフの問題だったが、一応全国公募の形式をとったものの、実際は九大医学部に全面的に負った。

当時九州には新設医大の企画はほかになかったし、九大医学部には優秀な教授ならびに助教の候補者が温存されていたことが幸であった。もちろん久大その他からも採用したが、その多くは九大出身者であった。

この定員の問題については国立大学に準じて決められたが、私の意図は各教室ともいわれる講座制をとり各科目も複数の教授を任命することにし、開設当座よりその線に沿ったところもあった。はじめ助教として採用し、教授資格を得た上で昇格することにした。この制度は容易に実現されなかったが、関連病院の完成とともに複数教授が発令されることになり安堵の胸をなでおろしつつある。

また施設の拡充も着々と実

医学部長時代を顧みて

元医学部長 菊池昌弘



昭和五十八年十二月から四年間の任務であったが、この時期は福岡大学医学部も開設十年を過ぎ、やっと医学部としての形がみえてきた頃で、卒業生もまだ少なからぬようにな方向へ進むのかも定まらなかつたが、逆に可能性も大いに残されていた時代だともいえる。

創立の混乱期を乗り越え新しいカリキュラムが始まったばかりであったが、学部長時代は次第にその率も低下し現在に至っているが、国試合格者も低下する（となく維持されている）ことに寄与している

創設の混乱期を乗り越え新しいカリキュラムが始まったばかりであったが、学部長時代は次第にその率も低下し現在に至っているが、国試合格者も低下する（となく維持されている）ことに寄与している

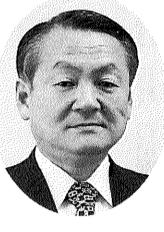
率が入学生に多くなり、また浪人生活の長かった学生は国家試験の成績が良くないことなどから懸念とされた。このころ、運転手がごららの大病院でつかつかと問いつ返された。当時大病院といえは九大病院だけだと認識していたのに、もう一つ他に大病院の存在を始めて指摘されて涙が出るほど嬉しかった。

今まで新設医大発足にまつわる苦心談を書き連ねてきたが、苦しいが、ないでもないが、曲りなりにも上りつめてみる。苦労が多かつただけに喜びも大きい。それについても福大医学部並びに病院の発足に当り援助と協力を受けた多くの方々へ改めて感謝の意を表したい。私自身についても人生の最後の仕事として全力を注いだ吾子が今後ますます育つてゆくのをたのしみにもまもってゆく気持である。

創設の混乱期を乗り越え新しいカリキュラムが始まったばかりであったが、学部長時代は次第にその率も低下し現在に至っているが、国試合格者も低下する（となく維持されている）ことに寄与している

福岡大学医学部の社会的使命

元医学部長 西園昌久



総合大学としての格を高めるための手段だったといえるかもしれない。ちょうど医学部開設解禁に遭遇したチャンスだったのだから。しかし、医学部開設の理念も財政的準備も決して明確あるいは充分だとはいえない。教授予定者たちは新しい大学にたいへんな意気込みをもって参加した。ちょうど大学紛争を体験し、国立大学のよさも悪さも身をもって知り尽くした人たちがあつたので、新しい医学部で理念を実現しようといはれていた。それだけに、開設された後も理念と現実との激しい落差を経験することになった。さまざまな矛盾

「東の慶応、西の福大」の旗

福岡大学に医学部ができてもう二十年になる。当時を振り返ると、多くの教授会メンバーは困惑と失意の中にスタートしたと思う。福岡大学にしてみれば、昭和二十四年の学制改革以来、追求している総合大学を医学部を開設することで完成したいという理由があつたことである。極端にいうと、医学部開設は

盾に直面する毎日だったといえよう。他学部のある教授の中には、「君ら医学部は十字架を背負って歩いていかねばならないのだ」と看破する人もいた。この「医学部ニューズ原稿依頼」には「良い思い出や印象深かったこと」を書きようにと記されているのを見て、これ以上の面白くないこととは書かないことにする。しかし、そうした困惑と失意が、いかに希望を取り戻したかを述べることは現状と将来のためにも有益なことかもしれない。私は昭和四十八年から十年間、医学部長に任ぜられたのであるが、努めて正しい情報とそれについての私の意見

率が入学生に多くなり、また浪人生活の長かった学生は国家試験の成績が良くないことなどから懸念とされた。このころ、運転手がごららの大病院でつかつかと問いつ返された。当時大病院といえは九大病院だけだと認識していたのに、もう一つ他に大病院の存在を始めて指摘されて涙が出るほど嬉しかった。

今まで新設医大発足にまつわる苦心談を書き連ねてきたが、苦しいが、ないでもないが、曲りなりにも上りつめてみる。苦労が多かつただけに喜びも大きい。それについても福大医学部並びに病院の発足に当り援助と協力を受けた多くの方々へ改めて感謝の意を表したい。私自身についても人生の最後の仕事として全力を注いだ吾子が今後ますます育つてゆくのをたのしみにもまもってゆく気持である。

創設の混乱期を乗り越え新しいカリキュラムが始まったばかりであったが、学部長時代は次第にその率も低下し現在に至っているが、国試合格者も低下する（となく維持されている）ことに寄与している

創設の混乱期を乗り越え新しいカリキュラムが始まったばかりであったが、学部長時代は次第にその率も低下し現在に至っているが、国試合格者も低下する（となく維持されている）ことに寄与している

あることが原則とされ、医学部だけを別にすることさえ抵抗がある。西日本医科大学と初めは問題にもされなかった。幸い昭和六十二年の第三十九回西日本医科学生体大会を引き受けたのを機会に大学当局と話がまとまりやうと大会前の四月に、情報センターに隣接して二階建ての建物を完成出来たのである。

当時の各クラブに一部屋を原則に割り当てるとともに、シャワー室も完成しそれぞれ活動拠点が出来たのは有り難いことである。四月四日に入所式と各クラブの旗贈呈式を

施行したが、くす玉がうまく割れずやり直したことも今思えば懐かしい。西日本医科大学体育大会の準備の方は、これは別に図書館があった跡に五年生の学習室を作るときの一室を準備室に充て、大会運営委員長立川裕君を始めとする運営委員と共に色々と準備に明け暮れ、予算の確保、会場の確保のために県や市の方々に訪問したり、九州大学にも大変お世話になったことが思い出される。

幸い多くの方々の協力も得た。卒業後、そして同窓生の自習のセンターにもなるだろうと期待しての施設である。

ある時、私を訪ねて下さったW.H.O.の中嶋宏事務局長を案内したことがあるが、この種のものの方々に見たが福大の最も参考になると見取図を所望された。何と云っても大学は人材養成の府である。適切な教育が正しく行われることが大学発展の原点である。社会に携われる実力のあるよい医者がたくさん育ち、その人たちが福岡大学卒業を誇りに思う教育を私も心がけた。

『新構想の大学院』

医学部が完成すると同時に大学院をスタートさせねばならなかった。医学研究科は講座の増設ができ、学生の自習空間が確保でき、クラブ活動だけでなくグループ体験が可能になったことと関係していると思つてゐる。私は医学教育振興財団の仕事で各国の医学教育をみてまわつたが、菊池教授、竹林教授にも英国に行かれた折に、ガイズ病院医科大学の病理標本展示館の中での実物教育を見て下さることをお願いした。

英国の実験校ノッティンガム医大には再度訪ねてAV教育施設を見学した。狭い図書室でいつも苦勞された当時の図書委員の三好教授にチーフになっていただいで医学情報センターを作り、これらを統合することができた。将来は

（一頁より続く）

た。広告欄については同窓会有志の全面的協力が得られ平成四年六月二十八日の西日本新聞朝刊（九州七県・山口県の一部、約八十三万部）に福岡大学同窓会、菊池院長、および医学部同窓会の山崎会長の鼎談を中心とする一面全部の二十周年特集誌面が掲載され、今回の記念行事に花を添えることができた。

○二十周年記念行事

七月十一日予定通り記念行事が挙行された。当日は記念講演会三百二十名、記念式典三百五十名、同窓会総会および記念式典百五十名、合同祝賀会四百五十名の出席を得、いずれの行事も盛況裡にどごおひらけを遂げた。岸本教授の記念講演は免疫学を中心とした最先端の医学の進歩の紹介と将来についての御講演で、極めて有意義な内容で多くの方々に深い感銘を与えた。記念式典と祝賀会では医学部長と福大病院長より二十年の発展の歩みが紹介され、今日までの歴史と実績、これまでに寄せられた多くの御協力を糧として、今後の努力に対する決意が述べられ、また多くの来賓からは、福大医学部・病院の今日までの発展と今後の前途を祝し、また今回発足した救命救急センターがその機能を十分に発揮し、今後益々地域社会に貢献されるようにとの期待が述べられた。合同祝賀会は堂にあふればかりの盛況で、時のたつのを忘れるような盛り上がりであった。

○記念行事を終つて

今回の二十周年記念行事は近い将来に二十五周年をひかえていることもあって、行事としては最小限の内容に留まつたが、多数の御参加を得、盛況裡に有意義な行事がどごおひらけを終つたことは誠に喜びに耐えない。改めて御出席いただいた方々に感謝し、また企画、準備その他に勞をおしまれなかつた医学部、病院、同窓会、西日本新聞社など関係各位に深甚な敬意を表したい。

（三頁へ続く）

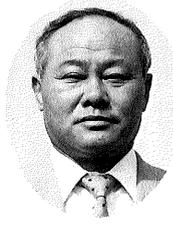


福岡大学医学部・病院創立20周年記念会

医学部・病院の

現在と将来を思う

前医学部長 三好 萬佐行



フォーラムの第四分科会(医学部・病院)の答申に要約された通りである。上に挙げた二つの課題は車の両輪であって、医学教育は本質的にチーム学習であり、大は講座の単位から、小は研究グループや診療グループがあり、ここに教師も学生も組み込まれていく。特に医学教育の中核である卒業後の教育は、これら講座、診療科や研究グループへの参加なくしては考えられない。医学部が設置される際、最低条件の講座の種類や数が定められているが、それだけでは変化・発展する社会に対応した医学部・病院は存立できない。それぞれが地域特性、時代的要望、あるいは人的効果を基に新しい講座や診療科、研究、研究所、病院等へ送り出す

一九八七年、私は、①教育スタッフの人事活性と②病院活動の支援を、当時の医学部長の仕事としての最重要課題と考えて、就任した。すでに医学部・病院では年毎の熱心な「教育ワークショップ」の論議を通じて、医学部・病院の教職員が「何を望み、何をやるか」としているのは明白となっていたし、菊池元学部長と共に運営協議員として医学部・病院にかかわっていた。その内容は福岡大学将来構想

医学部への提言

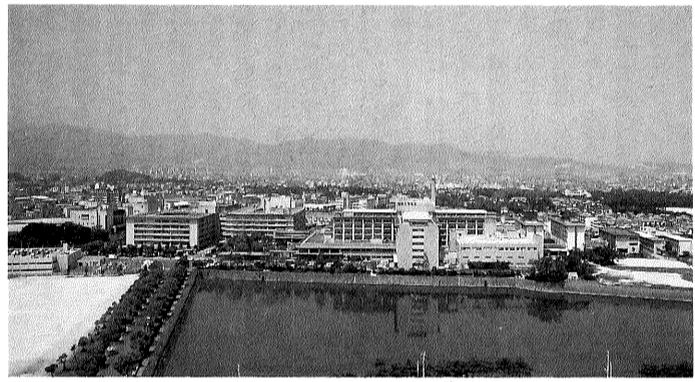
学長 宮野成二



福岡大学医学部創立二十周年を皆さんとともに祝いいたします。昭和四十七年、社会の強い要請を受けて、(1)正しい臨床医の育成、(2)地域社会医療への奉仕、(3)重点的総合体系的な基本方針を据え爪々の声を上げました。

今日、医学部、福岡大学病院及び附属看護専門学校は着実に発展し、すでにその本来の目的である教育、研究、医療の分野で注目すべき足跡を

さねばならない。有能な人材を無為に腐らすことは大学の損失であり、不実である。先任の菊池学部長の時に始められた主任教授制の採用は、逼迫していた助教や講師の教授昇任に道を開いたし、多少とも年齢に相応しい社会的待遇も与えられたようになつた。しかし、それで人事活動の決着がついた訳ではない。それは講座、診療科を主催する長を意味しない。医学部としての責任は、教室内の専攻も発達した。また、福岡大学に心を残しながらの方もあったが、私の任期の間にも六名の方々が他大学の教授へ転任された。彼等は教授・部長という名称と経済的待遇だけを求めたのではなく、講座・診療科の長としての活躍の場を得ようとしたのである。彼等が本学の卒業生であったなら、人材輩出の優れた大学として世の賞賛も得られたであろうが、残念ながら全て他大学の出身者である。福大医学部卒業生が増えるが、マンパワーは倍増した。学生教育においても、卒業後教育においても、多くの関心が用意されたことになつてくるのである。



福岡大学医学部

の向上の意味を私共に問いかけておりました。二十周年に際してこの事を特に強調したいと考えています。今日、社会は激動し医療技術の進歩は進歩、国民的年齢構成の変動もそのもたらす医療ニーズの変化が医学、医療の世界を揺るがせております。

さ、豊かさの点では全く異論のないところで、だが学問上の発想力、構想力に限定すればいかなるものでしょうか。今秋来学する五、六名のノベル賞受賞者の中の一人、シムス・ワトソンさん(現在 Cold Spring Harbor Laboratory, New York, 所長が DNA の二重らせん構造モデルを提唱した Nature 誌(一九五三年四月二十五日号)上に発表したのが一九五三年、二十五歳の時です。このニュースは世界の分子生物学者(当時はまだ分子生物学という呼称は一般的でない)に驚かされた。私にはイリノイ大学の有機化学専攻の院生でありましたが、講義でも早速とあげられ、セミナーでも発表されました。在米中の渡辺格教授から Nature 誌発行前にいち早く日本にも知らされたというのであります。

る。本院と筑紫病院からなる福大の病院では、発足以来、病院活動の充実のための懸案事項が多く、ハード・ソフト両面で整備が要望されてきた。医学部では、診療部長や筑紫病院部長の具体的な意見が固まり次第、検討し、支援していくこと、管理棟の建設と病室の拡充(手術室の実効活動)と予定診療科の発足という点で、筑紫病院部長は一致した意見にあり、医学部教授も臨床教育上必然のことと判断し、その支援をしてきた。管理棟が整備され、耳鼻咽喉科、泌尿器科、眼科が新しく発足し、部長(教授)が就任した。今また新しい内科の専任部長(教授)が決まりつつある。総合病院として必要な産婦人科が欠けているのは残念であるが、マンパワーは倍増した。学生教育においても、卒業後教育においても、多くの関心が用意されたことになつてくるのである。

このように、本院である福大病院では、学部の臨床各科と連動しているため、教授会の「教育ワークショップ」が一般化していきなかつたかと思ひますが、に電撃のようなショックを与えました。当時私はイリノイ大学の有機化学専攻の院生でありましたが、講義でも早速とあげられ、セミナーでも発表されました。在米中の渡辺格教授から Nature 誌発行前にいち早く日本にも知らされたというのであります。

「教育ワークショップ」でも繰り返して上げられてきた。学部長としてこの問題を教授会に諮問し、満票で第三内科の設立が必要との結論に達した。しかし、具体的な細目については関連診療科間で異論が多かつたようである。スター長(部長・教授)が選任され、人事構成が作られ、大学院専攻科目も発足するはずである。福大医学部・病院における新しい教育、研究分野の萌芽が得られたのである。

「教育ワークショップ」でも繰り返して上げられてきた。学部長としてこの問題を教授会に諮問し、満票で第三内科の設立が必要との結論に達した。しかし、具体的な細目については関連診療科間で異論が多かつたようである。スター長(部長・教授)が選任され、人事構成が作られ、大学院専攻科目も発足するはずである。福大医学部・病院における新しい教育、研究分野の萌芽が得られたのである。

自己紹介

平成三年十一月以降に昇任

内科学第二教授

吉田 稔



開設当初は呼吸器病を中心とした内科の教育、診療体系の基礎作りを専念しました。その後は、臨床的な研究としては主に肺気腫症をはじめとする慢性閉塞性肺疾患の病態生理像の解明に取り組んで来ました。また基礎的には、慢性、急性肺傷害と関連しての肺気腫の発症、肺水腫の病態生理、肺血管内皮細胞の代謝などに興味を持っていましたが、これからは臨床と研究の接点をさらに広げ、臨床に研究を進めたいと考えています。

開設当初は呼吸器病を中心とした内科の教育、診療体系の基礎作りを専念しました。その後は、臨床的な研究としては主に肺気腫症をはじめとする慢性閉塞性肺疾患の病態生理像の解明に取り組んで来ました。また基礎的には、慢性、急性肺傷害と関連しての肺気腫の発症、肺水腫の病態生理、肺血管内皮細胞の代謝などに興味を持っていましたが、これからは臨床と研究の接点をさらに広げ、臨床に研究を進めたいと考えています。

内科学第二助教授

中島と志行



臨床は消化器手術を主にしていますが、特殊な手術として広背筋や腹直筋を用いた筋皮弁による乳房再建術や胸壁形成術なども手掛け、乳房切断術後の患者さんに喜ばれております。また最近、興味をもっているのが腹腔鏡下胆嚢摘出術です。留学中にアメリカで爆発的に普及し、この新しい手技を目のあたりにすることができた幸運を生かし、我が国では最初に報告させて戴きました。福大でもこの手術を行い満足すべき成績を上げております。研究面では直腸液中の B-D-Gal (L-r)-D-GalNAc を指標として大腸癌をチェック出来るものかと考え、現在実験を重ねています。今後とも皆様の御指導御鞭撻を切にお願い申し上げます。

外科第二講師

内藤 英明



び第二外科で二年間医員として勤務しました。その後感染生物学大学院へ進み、主に免疫学を学ぶ補体反応抑制因子をテーマに学位を得ました。大学院の四年次に米国アラバマ大学にリサーチフェローとして留学させていただきました。HIV-1 の感染中和ヒト型モノクローナル抗体の開発を手がけました。この期間は技術的な面より組織の中のシステムの合理性や、自由な発想をどのような形で実験へ導入するかが非常に勉強になりました。平成二年十月から第二外科に復帰後は主に、乳腺、消化器とその免疫化学療法を担当しております。

「親心・子心」(7)

脳神経外科助教授 岡 一成



若い人たちに對して親心で一筆書くよう依頼を受けた。一書くと非常に難しいことであることに気が付いた。なぜなら人間も動物であり、過ごしてきた環境に考え方が左右されるから。鮭は生まれた川にしか帰らないし、渡り鳥は生まれ育った土地を往復するしかない。人の考え方も育つてきた環境で養われるため、その枠から抜け出ようとしても難しいことを痛感する。これからの話に響いていると思っている。この自信は他人から与えられる

を、学会で発表しましたが、未だに全部の発表を雑誌に投稿した訳でなく、恥ずかしい限りです。中学、高校、大学と野球部に籍を置き、真っ黒に(中学時代のあだ名はクロでした)なるまで練習してきました。が、入局後は十八人いないと試合できない野球より、二人でも試合できるテニスを週一回のペースで続けています。今後とも、仕事にテニスに諸先生方の指導を仰ぎながら努力して参りたいと存じます。宜しくお願ひ致します。

「患者さんに信頼される医師になりたい」など望めるものではない。病識の無い医師(意識障害の人物)にはなっていない。この事は研修医の諸君にも言えることである。先日、同窓会誌に本学一回生の中川君の記事で「阪大3内科で研修しているとき、猛烈な勉強のやり方、医学知識では同僚に全く引けをとらなかつた」「欧米では人の2倍ぐらい、日本では3倍ぐらいがんばる」

教室紹介

福岡大学公衆衛生学

当教室は福大医学部が発足した昭和四十七年以降の歴史があります。初代重松峻夫教授を初めとして、当教室の現スタッフは福益建夫助教授、久永富士助教授、嘉悦明彦助手、寛優子教育技術職員五人の他に大学院生の由利佳代先生、井上俊孝先生、研究生の柴田和典先生、宇治光治先生、レジーナ・マリア先生(後述)が加わっています。

今年四月から、JAI CAの留学生で、ブラジル・プロミッソ市保健局長からレジーナ先生が二年間の予定で研究にきています。老年保健問題、疾病予防、長寿の諸問題等の研究が主で、さらに当教室の活動が高まっています。

昭和五十五年長崎大学を卒業後、同大精神神経科に入局しました。四年後、学生血再灌流障害と心臓レニン・アンジオテンシン系です。今後とも御指導御鞭撻を賜りますよう心からお願い申し上げます。

昭和五十五年、熊本大学医学部を卒業、福岡大学麻酔科に入学しました。術前患者評価、人工呼吸、気管内挿管、硬膜外麻酔といった麻酔学の基礎を健二郎教授、田中経一助教授を初めとした諸先生に指導していただいた後、五十八年四月より麻酔科外来での疼痛治療(ペインクリニック)が仕事の中心となりました。現在はペインクリニックに加え週一日手術室に入りいゆる「麻酔をかける」

が、入局後は十八人いないと試合できない野球より、二人でも試合できるテニスを週一回のペースで続けています。今後とも、仕事にテニスに諸先生方の指導を仰ぎながら努力して参りたいと存じます。宜しくお願ひ致します。



左野 千秋

私が本紙に登場するのは昭和六十二年四月に第2外科講師として赴任時、平成二年のアメリカ留学によりに次ぎ今回で3回目となりますので、今回は自己紹介は除き福大で行っている私の仕事に関して少し紹介してみようと思いま



秀島 輝

昭和五十六年福大医学部を卒業。同年福大第二外科に入局しました。二年間の臨床研修後、一年間国立福岡中央病院でトレーニングを受け、再

「患者さんに信頼される医師になりたい」など望めるものではない。病識の無い医師(意識障害の人物)にはなっていない。この事は研修医の諸君にも言えることである。先日、同窓会誌に本学一回生の中川君の記事で「阪大3内科で研修しているとき、猛烈な勉強のやり方、医学知識では同僚に全く引けをとらなかつた」「欧米では人の2倍ぐらい、日本では3倍ぐらいがんばる」

計を主体に高齢社会と保健・医療・福祉の問題、寿命・生命表の研究、死因解

今年四月から、JAI CAの留学生で、ブラジル・プロミッソ市保健局長からレジーナ先生が二年間の予定で研究にきています。老年保健問題、疾病予防、長寿の諸問題等の研究が主で、さらに当教室の活動が高まっています。

昭和五十五年長崎大学を卒業後、同大精神神経科に入局しました。四年後、学生血再灌流障害と心臓レニン・アンジオテンシン系です。今後とも御指導御鞭撻を賜りますよう心からお願い申し上げます。

昭和五十五年、熊本大学医学部を卒業、福岡大学麻酔科に入学しました。術前患者評価、人工呼吸、気管内挿管、硬膜外麻酔といった麻酔学の基礎を健二郎教授、田中経一助教授を初めとした諸先生に指導していただいた後、五十八年四月より麻酔科外来での疼痛治療(ペインクリニック)が仕事の中心となりました。現在はペインクリニックに加え週一日手術室に入りいゆる「麻酔をかける」

が、入局後は十八人いないと試合できない野球より、二人でも試合できるテニスを週一回のペースで続けています。今後とも、仕事にテニスに諸先生方の指導を仰ぎながら努力して参りたいと存じます。宜しくお願ひ致します。

海外便り

「グラスゴー大学にて」

影浦 光義

皆様お元気で御活躍のことと存じます。私は三月末から、このグラスゴー大学の法医学・科学講座に一年間の予定で滞在しています。グラスゴー市はスコットランドの西側、ロンドンの北六四〇km、スコットランドの首都エディンバラの西七〇〇kmに位置し、クライド河の両岸に開けた街で、エディンバラが上品な山の手にするとグラスゴーは活動的な町にあたります。GLASGOW の由来はケルト語の GLASGU すなわち DEAR GREEN PLACE を意味します。スコットランドではすでに産業革命の時代から、教区学校

に第四位の大学です。一八六三年に都心の西の丘陵地に移転し、周りの環境にマッチするよう GOTTHIC REVIVAL DESIGN の市内を一望できる本館が建てられました(写真)。芸術、社会科学、神学、工学、法学、政治学、医学、科学、獣医学の八学部、一二〇以上の講座からなり、学生数一三、〇〇〇人、そのうち二〇



Kelvingrove Park より Glasgow University を望む

教室紹介

福岡大学泌尿器科学

一九七三年四月に開設されたが、当初は教授坂本公孝、助教有吉朝美(現筑紫病院教授)、助手大島一寛(現助教)の三名で泌尿器科診療を開始した。診療実績については「福大医紀」に報告しているが、重複を避けるが、高齢化が進みつつある今日、泌尿器科の需要はますますたかまりつつある。

入院患者の中では悪性腫瘍のしめる割合が年々増加し、拡大根治手術や集学的治療の導入によって担当医は気の休まる暇がない。膀胱根治手術ではなんらかの尿路変向術が必要であるが、これは有吉教授、平塚義治助教を中心とした当科のお家芸といつて良い。しかし徒らに流行を追うこ

となく、QOLを考慮した患者中心の医療が実践されていると自負している。当科における診療活動の中心の一つに小児泌尿器科がある。坂本教授が九州大学在職中から開拓して来た分野で、先天異常に対する尿路再建ないし形成手術が多い。数年前より大島助教が手掛けた尿道下裂の一期的尿道形成術は他の追随を許さない優れた成績をあげている。

待望久しかった体外衝撃波碎石器は今年三月導入され、臨床的に応用されている。最新のシーメンス製衝撃波ヘッドが組み込まれたため、疼痛が少なく、かつ効率の良い碎石が可能である。診療のみならず、教育・研究にも大きく貢献

に第四位の大学です。一八六三年に都心の西の丘陵地に移転し、周りの環境にマッチするよう GOTTHIC REVIVAL DESIGN の市内を一望できる本館が建てられました(写真)。芸術、社会科学、神学、工学、法学、政治学、医学、科学、獣医学の八学部、一二〇以上の講座からなり、学生数一三、〇〇〇人、そのうち二〇

に第四位の大学です。一八六三年に都心の西の丘陵地に移転し、周りの環境にマッチするよう GOTTHIC REVIVAL DESIGN の市内を一望できる本館が建てられました(写真)。芸術、社会科学、神学、工学、法学、政治学、医学、科学、獣医学の八学部、一二〇以上の講座からなり、学生数一三、〇〇〇人、そのうち二〇

リサーチビジターからの声の欄

精神医学 申 捍 淑



去年十月に福大に来た笹川奨学金第九期生の申捍淑です。一九八七年に、WHOからの派遣で中国に来られた西園教授の精神療法の講義を聞いたことがあって、自ら希望して福大精神科に来ました。来る前は未知の世界に対しての不安や心配がありました。が、教授を初め、医局の先生方の暖かい配慮とご指導の下で生活も勉強も特に困ることもなくやれています。

福大精神科は病棟施設もずばらしいし、治療活動も多種多様です。窓には鉄格子がなく、精神科の患者さんが自由にしゃべり、その時には今の経済大国は維持できないことがこの地についてよく理解できます。研究の面では、本学法医学教室はグラスゴー大学と遜色ありませんが、当大学には実学の面でも長い歴史と大きな実績があります。もちろん私もそのもの見方、考え方を学んで帰りたいと思っております。

到着当初の気候は一日の内に晴、曇、雨、強風と目まぐるしく変わる厳しいものでしたが、五月の中旬に四年振りの最高気温(27℃)を記録して突然冬から夏になってきました。よい天候が続く、公園では皆んな裸になって日光浴を楽しんでいます。スコットランドは、イングリランドのどこまでも続く屈曲した田園風景とは対照的に非常に変化に富んだ風景を築き上げてくれています。是非一度お越し下さい。

第八十六回 医師国家試験 合格者と入局先

- 平成四年四月四日、五日に行なわれた第八十六回医師国家試験に本学から百三十二名が受験し、九十八名が合格した。合格率は七四・二%であった。合格者の研修先は(福大病院研修生は科名のみ)次のとおり。
- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|----|
| 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 裕美 | 熊大精神科 | 清藤 千景 | 熊大内科一 | 久原 尚子 | 健康管理科 | 久保田 郁子 | 産婦人科 | 黒木 聖子 | 放射線科 | 小沢 昌彦 | 熊大内科二 | 佐田 正二郎 | 九大整形外科 | 貞元 健一 | 九大内科三 | 篠原 哲也 | 麻酔科 | 志富田 由佳 | 徳島大耳鼻科 | 嶋津 剛典 | 筑紫内・消 | 白濱 浩司 | 鹿大外科二 | 周防屋 祐司 | 耳鼻咽喉科 | 仙波 浩志 | 眼科 | 平 佳子 | 筑紫病院泌尿 | 竹尾 善文 | 外科二 | 竹山 康章 | 内科一 | 玉利 秀樹 | 内科二 | 陳 美智 | 順天堂大眼科 | 津川 周三 | 金沢大内科二 | 緒方 賢司 | 内科一 | 小野 郁子 | 内科一 | 河島 裕高 | 眼科 | 木下 裕介 | 川崎医大整外 | 木下 |
|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|----|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|--------|----|

教室便り

学位取得

次の方は、平成三年十一月十四日付で、福岡大学より医学博士を授けられた。

原 伸吾 (解剖学第二) 論文名「Gap Junctions between visual cells in the squirrel retina.」

市原 次郎 (産科婦人科学) 論文名「Effect of vasoconstrictor and vasodilator on isolated human umbilical vein.」

津田 直隆 (解剖学第二) 論文名「ホルモンの鼓膜の線維配列の走査電顕的研究」

論文章「Tangled masses of central axons (central axonomas) in the brain stem: Anatomical evidence for the regenerative growth of human central axons.」

論文章「Crohn 病患者の中枢神経性軸索の再生性生長

研究 石橋 守興 (内科学第一) 論文名「非ホジキンリンパ腫における骨髄浸潤と骨髄線維化の臨床的意義」

論文名「サルベム膜顆粒における髄液排出に関する形態学的研究」

論文名「低体温体外循環における溶血素の重要性について」

論文名「低体温体外循環における溶血素の重要性について」

論文名「肝細胞癌に対する動脈塞栓術」

論文名「肝細胞癌に対する動脈塞栓術」

論文名「肝細胞癌に対する動脈塞栓術」

論文名「肝細胞癌に対する動脈塞栓術」

論文名「肝細胞癌に対する動脈塞栓術」

学术交流

平成三年十一月以降の海外留学または海外から本学の留学生者はつぎのとおり。

海外留学

① 研修先の目的期間 大島 孝一 (病理学第二)

② 山田英智 (解剖学第二) ③ プルーム・フォーセット組

④ 黒木政秀、春野政虎、荒川文子、松岡雄治 (生化学第一)

⑤ 荒川規矩男 (内科学第二) ⑥ 質疑応答 高血圧のQ&A

⑦ 荒川規矩男 (内科学第二) ⑧ 質疑応答 高血圧のQ&A

⑨ 質疑応答 高血圧のQ&A

⑩ 質疑応答 高血圧のQ&A

新刊紹介

た著書または単行本を以下紹介する。(1)書名(2)発行所(3)発行年(4)価格

① 山田英智 (解剖学第二) ② プルーム・フォーセット組

③ プルーム・フォーセット組 ④ 黒木政秀、春野政虎、荒川文子、松岡雄治 (生化学第一)

⑤ 荒川規矩男 (内科学第二) ⑥ 質疑応答 高血圧のQ&A

⑦ 荒川規矩男 (内科学第二) ⑧ 質疑応答 高血圧のQ&A

⑨ 質疑応答 高血圧のQ&A

⑩ 質疑応答 高血圧のQ&A

⑪ 質疑応答 高血圧のQ&A

福岡大学医学会 例会の報告

平成四年一月二十九日(水)午後二時より

1. 座長 小野 庸 教授

2. 座長 三好萬佐行 教授

3. 座長 犬塚 貞光 教授

編集後記

福岡大学医学部も創立されては二十周年を迎えました。

そのようになつたら、おめでとうございませう。

そのようになつたら、おめでとうございませう。

そのようになつたら、おめでとうございませう。

そのようになつたら、おめでとうございませう。

そのようになつたら、おめでとうございませう。

そのようになつたら、おめでとうございませう。

そのようになつたら、おめでとうございませう。